なることかと、全世界の目が北京に注がれました。そのとき、陸軍中佐として北京の日本大使館に駐在していた柴五郎は、連合軍の指揮官におされました。四十二歳であった柴中佐の沈着で果断、そして勇かんな態度は、各国の賞賛をあびました。とくにイギリスは、この事件のあと、勲章をおくってその功績をほめたたえたほどです。

柴中佐にとっては、少年時代の、言葉には言いあらわせない苦しみをのり越えてきたことを思うとき、どんな困難につき当ってもたじろぐことはなかったのでしょう。

この事件のあと、戦いに勝ちほこった各国軍が、北京市内で略奪や乱暴を働いて中国人の非難と反感をかいました。このような中で、柴中佐は自分の指揮する兵士に向って、厳しく規律をいましめ、逆に中国人を保護する態度に出ました。戦いに負けたものが、どんなに悲惨であるかを、身をもって体験し、誰